

かわだんぎ 川談義(9)

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会

第9号

令和7年3月

「北上川流域文学散歩-2」

軍司俊道

(北上川流域連携交流会 理事長)

中津川編に続く文学散歩です。今回も岩手ゆかりの作家さんの作品です。自然との触れ合いもいいですが、図書館でも素敵な出会いがありそうですよ。

山口青邨「回想の南瓜『みちのく初夏』」より
盛岡市街の真中を貫いて中津川といふ川が流れてゐる。

私はこの川原に一面に咲いてみた勿忘草を忘れることが出来ない、どうかすると誰もが気がつかないほど地味に咲いてゐるが、細かいコバルト色の花の群落は実に美しかった。

私にしても、この花がフォルゲトミナットなどと、しゃれた名前をもってゐることを知ったのは少年の頃ではなかった。

太田愛人「三つの森の物語『空罐のヒナギク』」より

盛岡の杉土手というところで、この二つの川にもう一つの川が合流する。市内を貫流する中津川である。市の中央にある古城のほとりを流れ、藩政時代の名残の擬宝珠を欄干につけた古典的な橋をくぐりぬけて流れる中津川も清流であった。冬は鴨や白鳥が飛来し、初夏にはけむるようにワスレナグサが中洲に咲く。

太田愛人「緑の牧歌『源流溯行』」より

六月に、久しぶりに故郷の盛岡に帰った。市内を流れる中津川の清流にワスレナグサの青い花が咲き、橋の上からも認めることができた。はじめて亭主の郷里にいったつれあいに、「どうだ、美しい町だろう」と自慢した。高層ビルが林立し、煙突が立ちならぶよりも、この方が遥かに自慢に価するのである。帰郷は心までも古い世界にひきもどしてくれた。

足田輝一「草木夜ばなし・今や昔『クルミを宮沢賢治がみつけること』」より

夏の一曰、イギリス海岸に立った私は、緑の濃いクルミの緑陰に腰をおろして、ゆったりと永遠の流れをみせる北上川を展望していた。ほとんど波も立てず、静かに流れ下る川岸は、おりからの夏の満水期で、ぬめぬめとした白い泥岩はあまり露出していなかった。それでも、すべる靴に気を配りながら、水際におりたつと、やわらかい岩層のあいだに、クルミの殻の破

片らしいものが、いくつか埋まっていた。ナイフの刃で掘りだしてみたが、それらはもろくて、薄灰色の粉のように、散ってしまった。冬の渇水期になると、川床がもっとあらわれて、年によって露出する地層に差があるためか、クルミの化石のよくみつかると、あまりみつからない年とがあるそうだが、いまでも、このイギリス海岸では、賢治の発見した、同じバタグルミの化石をひろうことができる。

賢治が、この川辺に立ったのは、大正十一年（一九二二）ごろ、二六歳の青年であった。半世紀以上の歳月をへだてている。いま眼前を、はるか左手の川上から、右手の下流へと、休むことのない流転の帯をくりひろげている水、その岸をかこむ緑の樹々、その景觀には、どれほどの変化がおこったであろうか。花巻の街は、もちろん現代の発展のなかで、大きい変貌をみせているが、ここイギリス海岸の光景には、それほど本質的な変革がなかったのではなかろうか。

私はいま、宮沢賢治の眼にうつった映像を感じ、彼の胸中に去来した心象風景に共鳴し、この海岸に立つクルミの樹を仰いで、北上の風土の上に重ねられてきた星霜を想うのである。

澤口たまみ「岩手の野草百科」より

盛岡市出身の太田愛人氏のエッセイ集の一節。「私は、ひそかに、その頃行けば必ず中津川にワスレナグサが咲いている、と予想していた。…私の自然感が見事に的中して、古典的な上の橋から川上のほうにワスレナグサの群落が青くけむるように咲いていた」

澤口たまみ「岩手の野草百科」より

ダム湖の水際が、遠くから紅色のカーペットを敷きつめたように見えた。思わず車を降りて近寄ってみると、見わたす限りのエゾミソハギの大群落。

この花はタップリと蜜を流しているのか、無数のハナバチが夢中で飛びまわっていた。あたりには彼らのハミングが響き、まさに世は平和そのもの。（※ 御所湖のこと）

澤口たまみ「岩手の野草百科」より

カキツバタという名前の由来は、昔この花の汁を布にこすりつけて、染め物に使ったことから「書きつけ花」との説がある。

そう言えば、盛岡の真ん中を流れる中津川の岸边には、山岸の群落から移植したカキツバタが育てられているが、あれは確か、紺屋町のあたりだった。

國香よう子「縄文土風」より

ふるさと西根からの帰途、岩手町御堂でふと脇道にそれ、北上川源流の御堂観音に立ち寄った。こんもり茂った木立ちの中は音一つもなく鎮もり、神域らしい佇まいをみせている。木洩れ陽の中、石段を上ると、どこからともなくほのかな芳香がただよってくる。

「あゝ、いい香り、なんの香りかな」とあたりを見回すと、どうやら木ちの中の桂の木が、香りを発しているらしい。家に帰って図鑑を調べると、カツラの語源は「香出」からくると知り、なるほどと納得がいった。

山本玲子「花と香りと女のくらし」より

私は、四百年前から毎日、自家製のお香を焚き続けていたというお宅を、ふとしたきっかけで知った。北上川の川瀬の音もさわやかに聞こえそうな、水沢市黒石の千葉武男さんのお宅である。千葉家では、北上川の川べりにあったネムの葉をお香にして、代々焚き続けて来た。そのかおりは、「独特のやわらかな淡いかおりがする」と、武男さんの奥さん・ヒサさんは語った。また、香炉の中にカギ形に香をまき、その香の燃えた長さで時間を計る「香時計」としても、日用役立てたと教えてくれた。